



ツキノワグマとヒグマの特徴

日本では北海道にヒグマ、本州と四国にツキノワグマが生息します。体格差はあるものの、ともに五感や身体能力が大変すぐれています。また、山の多様な資源を食べる雑食動物です。

	ツキノワグマ		ヒグマ	
生息地	本州・四国		北海道	
	オス	メス	オス	メス
体長（頭胴長＋尾長）	120～150cm	100～130cm	150～200cm	140～170cm
体高	50～60cm		70～120cm	
体重	50～120kg	40～70kg	150～250kg	100～150kg
二足で立ったときの高さ	150cm		300cmになることも	
野生下での寿命	15～20歳程度		20歳程度	
出産	冬眠中に1～2頭を出産		冬眠中に1～4頭を出産	
推定生息数	4万4000頭		1万1700頭	
性格	臆病、用心深い、好奇心が強い、執着心が強い			
聴力	非常に優れている			
視力	人間と同等			
嗅覚	とても敏感			
走る速さ	時速40～50km		時速55～65km	
活動時間	朝夕・薄暮れ時に活発			
食べ物	雑食（木の実、茎、葉、花、アリ、カブトムシの幼虫、魚）			
冬眠する場所	木の空洞や根の下、岩穴		地面に穴を掘り、その中で	
ツメ				
	長さ3～4cm。 先が鋭い。		長さ5～8cm。 鋭いが、やや丸みを帯びている	



足跡



指が5本、指の上にツメの跡があるのが特徴。



左) 写真: アフロ
右) 写真: imagebroker/ アフロ

日本に生息するクマは2種類

ヒグマとツキノワグマ 驚異の身体能力と習性

近年、全国でクマの出没が相次ぎ、ときに人や家屋、家畜やペットに被害を及ぼす「熊害」が深刻です。

日本にはヒグマとツキノワグマが生息しています。かつては絶滅も危惧されましたが、現在は個体数が増加し、ヒグマは約一万二千頭、ツキノワグマは四万四千頭以上と推計されています。大型のヒグマに対し、ツキノワグマは人間と同等の体格ですが、どちらも時速五十キロで走るほどの驚異的な身体能力を持ち、木登りや水泳もこなすほど機敏です。木の実を好む雑食性で嗅覚も鋭いです。こうしたクマの特性や習性を正しく知ることが、不測の事態や危険を避けるための第一歩となります。



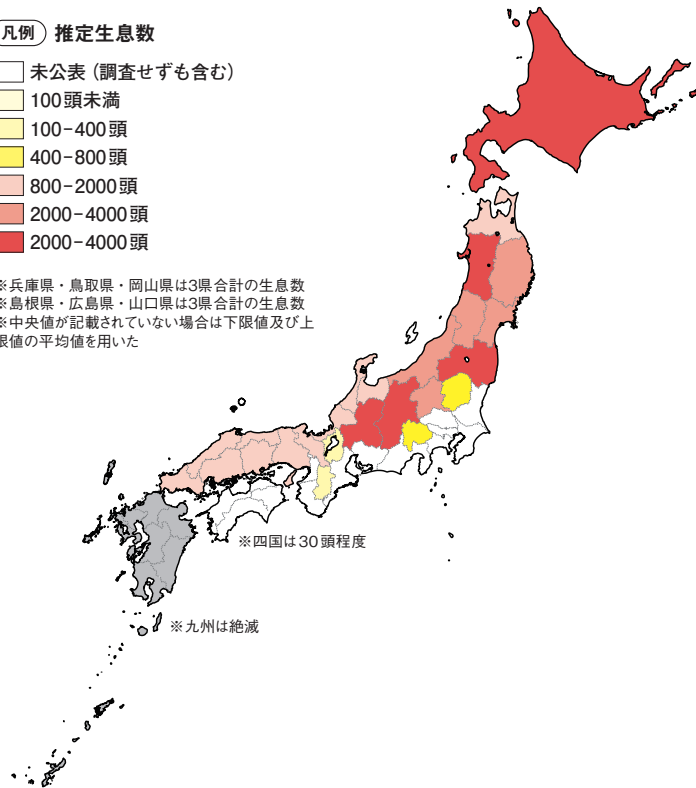
クマの個体数は増加傾向

北海道や東北を中心に生息域が広がり個体数は増加傾向にありますが、地域差は激しく、九州では既に絶滅したと考えられています。

凡例 推定生息数

- 未公表（調査せずも含む）
- 100頭未満
- 100～400頭
- 400～800頭
- 800～2000頭
- 2000～4000頭
- 2000～4000頭

※兵庫県・鳥取県・岡山県は3県合計の生息数
※島根県・広島県・山口県は3県合計の生息数
※中央値が記載されていない場合は下限値及び上限値の平均値を用いた



※四国は30頭程度

※九州は絶滅

クマが人里に現れる理由

クマを通して見える
日本社会構造の変化

クマが人里に現れる理由は、山の環境と人々の生活の変化にあります。冬眠前の栄養源となるブナ等の木の实が不作の年は、食料を求め人里への出没が増します。

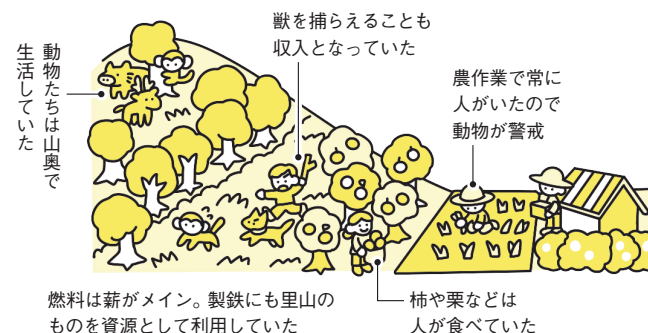
また、かつて里山は燃料の薪の収集で人の出入りが多く、見通しの良い緩衝地帯として機能していました。しかしエネルギー革命により薪が不要になると里山が放置され、藪が深まり、境界が曖昧になりました。さらに過疎化により、田畑の放棄地が増えたこともクマが市街地に現れる一因となっています。

環境だけでなく社会構造の変化も、人間とクマの距離を急速に縮めてしまったのです。

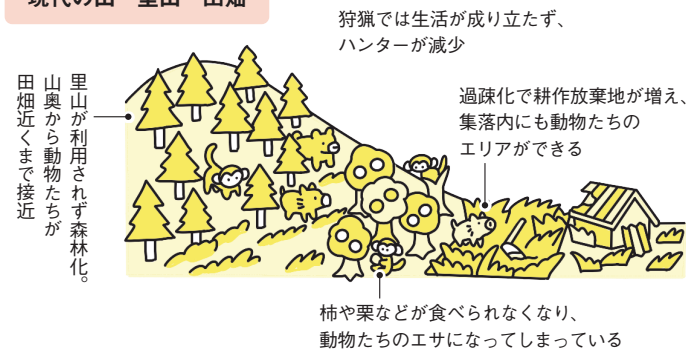
クマのすみか、人のすみか

かつて保たれていた人と獣との境界線が、過疎化や生活様式の変化により曖昧になっています。人の気配が消えた里山は、今やクマの活動圏へと変わりつつあります。

昔の山・里山・田畑



現代の山・里山・田畑



クマの一年

春の冬眠明けから冬の出産まで、クマは季節ごとに決まった行動パターンをとります。特に冬眠準備にあたる秋の食い溜めは、生存に関わるため最も活動的な時期となります。

4月頃に目覚め、冬眠穴から出る。食べ物を求めて山の中を歩き回るが木の実が十分に実っていないため「樹皮はぎ」を行い、水分や栄養をとることもある。子グマは危険を察知すると木の上に逃げるようになる。



初夏は繁殖期で、特にオスは広範囲を移動する。0歳の子グマはほかの大人のオスに「子殺し」されることもある。1歳になった子グマは親離れをする。

基本的にクマは慎重だが、若いクマは好奇心が強く、人に近づく可能性がある。

春
夏
冬
秋

12月頃から冬眠。この間、栄養がとれたメスは冬眠中に1〜2頭を出産する。昨年生まれの子は母と冬を越すが、約半数はこの時期までに命を落とす。



イラスト制作者：江縁 紗耶

不意の
遭遇が招く
攻撃のリスク

●子連れの母グマは非常に神経質である。子を守るための防衛本能が強く、子を守るために人を襲うことがある。

●人とクマが互いの存在に気づかず至近距離で鉢合わせた際、クマもパニックに陥ることがある。その結果、身を守るための反射的な攻撃行動に出るケースが少なくない。

今日から始める クマを寄せ付けない環境づくり

クマから身を守るため、生活環境を見直しましょう。庭にはエサとなる果実やゴミを放置せず、見通しを良くするため草むらを刈り取ります。雨戸は緊急時の時間稼ぎに有効なので、壊れていないかなど見直しましょう。外出時は一人を避け、ラジオ等音の出るものを携帯。食べ残しは餌付けに繋がるため、必ず持ち帰ります。こうした点検は家庭だけでなく、学校や職場等でも行いましょう。自治体アプリ等での情報収集も不可欠です。万一クマに遭遇し負傷した際は、外科を受診してください。クマの知能は犬や三歳児並みに高いと言われ、人間社会に慣れさせない対策が必要です。

クマに遭遇したら

万が一クマに遭遇したら——。自分自身のパニックを抑え、クマを刺激しない行動をとることが最優先です。相手の出方をうかがいながら、冷静に距離を取ることを思い出しましょう。



とにかく落ち着き、クマに背を向けずにゆっくり後ずさり



自分の安全を確保したら、警察や自治体に通報



襲われそうになったらうつ伏せになって手で首を抑える

NG



後ろを向いて
逃げてはいけません！



子グマを見つけても
近づかない！

用意しておきたいアイテム

クマは基本的には警戒心が強く、クマ自身も人に会いたくはありません。そもそもクマのほうが人間よりも耳も鼻もよいので、クマに先に気づいてもらい、クマのほうから避けてもらうようにしましょう。

熊鈴

クマ対策の基本中の基本。腰などに装着し、移動中に音を鳴らし続けることで、こちらの存在を周囲に知らせる効果がある。



ヘルメット

頭部の保護に加え、視認性を高める役割を持つ。クマに発見されやすいよう、オレンジや赤などの明るい色を選択したい。



熊よけスプレー

主成分はカプサイシン。目や鼻の粘膜を刺激して動きを止める「最終手段」。即座に使えるよう腰に携帯し、EPA認証（米国環境保護庁）の記載がある確かな製品を選ぶ。使用期限の確認も。



ラジオ

人の気配を広範囲に伝えるために有効。音楽よりも、人の話し声が絶えない番組を流しておくことで、より効果的に人の存在を知らせることができる。



家のまわりの見直しポイント

クマを人里へ引き寄せないためには、日頃からの環境整備が不可欠。まずはエサとなる物をなくし、隠れ場所を作らないといった基本的な対策から徹底しましょう。

OK



- 1階の窓は雨戸やシャッターを閉め、物理的な侵入を防ぐ
- ゴミ箱や段ボールは屋内に片付けられ、臭いを遮断
- 果樹は伐採するか、登れないようトタンを巻いて保護
- 草をきれいに刈り、周囲の見通しを良くしている

NG



- 換気のために1階の窓が少し開いている
- 食べ物の入ったゴミ箱や段ボールが屋外に出っぱなし
- 実が大量になったままの果樹が放置されている
- 家の周囲に草むらが生い茂り、クマの隠れ場所になっている

木を 伐採したく ない場合

思い入れのある樹木を維持したい場合は、トタン巻きが有効。クマの爪が掛からないよう、1.8m程度の高さまでトタンを巻きつける。固定する針金の向きも、爪が掛かりにくいよう縦向きに揃えるとよい。

増え続けるクマの対処法

「すみ分け」を目指す
根本的な解決を

クマは森林生態系に欠かせない構成員ですが、市街地への出没が相次ぐなか、抜本的な対策が求められています。山の中で維持できる個体数の上限に近づいているため山からクマが押し寄せる事態は今後も避けられません。目の前の個体を排除するだけでは、一時的な処置に過ぎないのです。

今後は山の中の個体数自体を適切な水準に抑える管理が必要となりますが、ハンターや専門家の不足や高齢化など課題は山積しています。目指すは、山の中だけで生きてもらう「すみ分け」の徹底です。野生動物を人里へ近づけない仕組み作りと、適切な個体数維持の両方が急務です。

クマによる被害の歴史

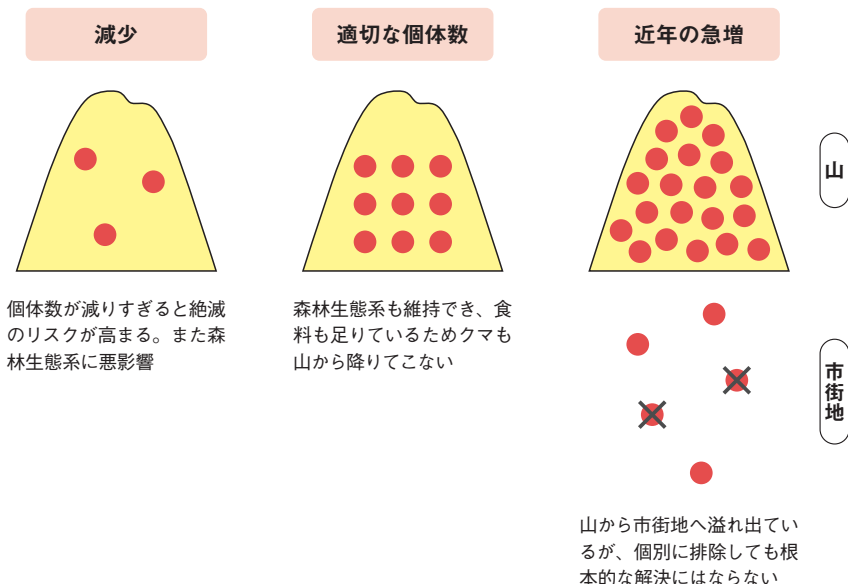
過去に起きた主な被害を振り返ると、2020年代以降、市街地への出没が急増していることがわかります。これまでの事例をあらためて把握し、身近に潜む危険への対策を再点検しましょう。

発生日	主な発生日例（場所）	被害者数	概要
1915年	三毛別熊被害（北海道）	死者7名、 負傷3名	日本史上最悪の獣害被害。冬眠に失敗した巨大ヒグマが数日間にわたり集落の民家を連続で襲撃。
1923年	石狩沼田幌新の事例（北海道）	死者4名、 負傷3名	開拓民の集落が襲撃された。三毛別に次ぐ凄惨なヒグマ被害として記録されている。
1970年	福岡大ワンゲル部の遭遇事例（北海道）	死者3名	日高山脈を登山中の大学生らが執拗にヒグマに追跡・襲撃された。持ち物を奪われたことが発端とされる。
1976年	風垂山・風不死岳の事例（北海道）	死者2名	山菜採りのグループがヒグマに遭遇。遺体が「土に埋められ隠される」というクマ特有の習性が確認された。
1988年	戸沢村の事例（山形県）	死者3名	本州における史上最悪級の被害。ツキノワグマによるもので、短期間に特定の個体が次々と人を襲った。
1996年	上高地・梓川の事例（長野県）	負傷2名	観光地のキャンプ場テント内でツキノワグマに襲撃された。人間の食料の味を覚えたクマによる典型例。
2016年	十和利山連峰の事例（秋田県）	死者4名、 負傷3名	タケノコ採りに来た人々が相次いで襲撃された。一つの地域でツキノワグマが連続して人を殺害した異例の事例。
2019年	OSO18被害（北海道）	家畜被害 多数	乳牛66頭を襲い続けた巨大ヒグマ。警戒心が極めて高く、数年にわたり捕獲を逃れた。
2021年	札幌市東区襲撃被害（北海道）	負傷4名	市街地に迷い込んだヒグマが、住宅街や自衛隊駐屯地内で次々と人を襲った。
2023年	大量出没（東北・北海道）	死者6名、 負傷200名超	過去最多の人身被害を記録した年。食料不足により全国各地の住宅街にクマが現れた。
2025年	大量出没（東北）	死者13名、 負傷200名超	被害者数ともに2023年の過去最多数を更新。

※2025年の4～10月に処理したクマの数は11289頭（速報値）。2006年からの調査で最多。

クマの適切な個体数のイメージ

山の中で暮らすクマは生態系の重要な一員。減りすぎても増えすぎてもいけません。近年の急増により、クマは市街地へ溢れ出ています。



知っておきたい「改正鳥獣保護管理法」

人里へのクマ出没急増を受け、迅速な対応を可能にする法改正が行われました。安全確保を最優先に緊急時の銃猟を認める新制度の要件と仕組みを知っておきましょう。

緊急狩猟が可能となる条件

- クマが人の日常生活圏に侵入、またはそのおそれがある
- 危険防止が緊急に必要
- 猟銃以外での確かつ迅速な捕獲が困難
- 住民らに弾丸があたるおそれがない

緊急狩猟実施者の要件

- 猟銃免許を有する
- 過去1年以内に、2回以上の銃猟または射撃練習を実施
- 過去3年以内に、緊急銃猟児と同種の銃器でクマなどの捕獲経験がある

